様式 C-7-2

自己評価報告書

平成 23 年 5 月 9 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2011
課題番号：20520248
研究課題名（和文）　ディケンズの速記的造形術とヴィクトリア朝文化

研究課題名（英文）　Dickens' Stenographic Characterization and the Victorian Culture

研究代表者
松本　靖彦（MATSUMOTO YASUHIKO）
東京理科大学・理工学部教養・准教授
研究者番号：10343568

研究代表者の専門分野：英文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：英文学　ディケンズ

１．研究計画の概要

(1)　チャールズ・ディケンズの人物造形においては、「断片（的な特徴）」が「全体像」へと成長することが多い。これは彼が作家として成功をおさめる前に修得した速記術に似ている。速記というのは、細かな点や線（断片）がイメージや概念に化ける世界だからである。

(2)　本研究は以下の 2 点を目的とする。

①速記とディケンズの想像力との間のアナロジーを鍵として、彼の想像（創造）力の源を解き明かすこと。

②「断片」が「全体像」へと膨らんでいくという傾向が、ディケンズだけでなく、ヴィクトリア朝の社会や文化に通底したものであることを例証すること。

２．研究の進捗状況

(1)　研究方法

本研究は特定の理論的立場に立脚したものではない。本研究遂行過程で発表した論考の中には精神分析理論を援用したものもあるが（'Dickens via Freud and Deleuze: "*Fort*"-"*Da*" Games and Vacillations in *Our Mutual Friend*' ５．項参照)、本研究は、基本的には速記とディケンズの想像力の間のアナロジーを鍵とした考察である。

(2)　これまでに得られた成果

①平成 20 年度
当年度の最大の成果は、日本国内では入手も閲覧も不可能な 2 つの史料に直接触れる機会を得たことにあった。
当年度のひとつの目標は、速記自体に関する資料を収集、吟味することであった。年度を通じて、特にディケンズと関連のある速記に関しての主な文献、論考はほとんど読み尽くしたが、最後に 1 点、William E. A. Axon, "Charles Dickens and Shorthand" だけは読むことができずにいた。
一方、文字と装飾との関係について示唆を与えてくれると思われる史料（Bowes School の学童が使用していたノート）も歴史家の引証でその存在を確認していただけで実物を目にしたことはなかった。
当年度末に国外旅費を使用した研究旅行によって、上記いずれの史料にも直接触れることができた（前者は大英図書館、後者はディケンズ博物館所蔵)。
その結果、数ある速記の中でのガーニー式速記（ディケンズが修得した速記術）の位置づけについて明確に理解することができた。また、文字と絵（イメージ）が自由に絡みあうテキストの例を実際に目にすることができ、ディケンズが作品の中で描写しているもの（文字とイメージとの混交）が、ただ彼一人の想像力の産物ではなく、より広い文化的広がりをもっていることを確認することができた。

②平成 21 年度
前年度から考察をすすめていた作品『骨

董屋』（*The Old Curiosity Shop*）の中心的主題とヴィクトリア朝にイングランドで流行していた活人画（tableaux vivants）という見世物との関係について新たな知見が得られた。その内容をもとに「見世物小屋としての『骨董屋』と人形の死に様」という論考を作成することができた。その成果はまず日本英文学会第 81 回大会において口頭発表し、その際質疑応答や個人的な会話を通じて得られた収穫をもとに論文の形に書き改めたものを『ディケンズ・フェロウシップ年報』に発表した（５．項参照）。

また、購入した文献・資料を調査する過程で得られたヒントをもとに『互いの友』（*Our Mutual Friend*）について執筆途中だった英文論考を完成させることができた（５．項参照）。

③平成 22 年度

上半期は、『ドンビー父子』(*Dombey and Son*)に関する綿密な分析をすすめる過程で、自己を他者の内に投影することに関して新たな着想が得られた。

下半期は、平成 21 年度に英文論考を執筆中に得られた着想―フロイトが『快原理の彼岸』で論じている「死の本能」の観点から『骨董屋』と『互いの友』を並べて読み解くこと―を日本語で論考の形にまとめることができた（５．項参照）。

また、年度末にかけて、上記の日本語論考に加筆、修正を加えながら英語に書き直した論考を作成することができた。

(3)　平成 23 年度以降に向けて

以下の具体的な目標達成を通じて、本研究代表者が抱いてきた複数の着眼点を結びつけ、より包括的な視座を得たい。

①　まずは、平成 22 年度に得られた着想をもとに『ドンビー父子』に関する日本語の論考を作成したい。

②　ディケンズの第 1 回アメリカ訪問（1842 年）前後の資料・史料を調査し、可能ならば「放浪（自由）」と「拘束」という観点から（この時期の）ディケンズ（ヴィクトリア朝文化）の一傾向を論じた日本語の論考を作成する。尚、これは４．項(3)の研究推進方策と関連している。

③　平成 22 年度末に作成した英語論考を推敲し、学会誌あるいは論叢に投稿する。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）

ディケンズの想像力と速記との間のアナロジーに着目した論考を作成することができたこと。また、資料・史料収集をする過程で本研究に着手する前には予想すらしなかったディケンズ作品に関する新たな知見が得られたこと。

４．今後の研究の推進方策

(1)　速記的な描写という観点から、ディケンズを他のヴィクトリア朝作家と比較する作業を行う。

(2)　人物造形における、ごく控えめな抑制された叙述（描写）が心理的な深みを示唆し得るという観点から、『ドンビー父子』についての論考を作成する。

(3)　本研究着手以前に研究代表者が取り組んでいた研究テーマである、「大人の中の（内なる）子ども」という概念と本研究の着眼点である速記とを結びつけることが可能か否か考察する。

(4)　(1)～(3) まで作業や考察において得られた成果を、「速記」、「断片から全体像へ」、「(境界) 線を越える」などの観点から結びつける総括的な分析・考察を試みる。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

①Yasuhiko MATSUMOTO、“Affectation and Laughter in Dickens’ *Great Expectations*”、『東京理科大学紀要（教養篇）』第 41 号、405-422 頁、2009 年、査読有

②松本靖彦、「見世物小屋としての『骨董屋』と人形の死に様」、『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』、第 32 号、4-17 頁、2009 年、査読有

③ Yasuhiko MATSUMOTO、‘“Dickens via Freud and Deleuze: “*Fort*”-“*Da*” Games and Vacillations in *Our Mutual Friend*’、『東京理科大学紀要（教養篇）』第 42 号、143-158 頁、2010 年、査読有

④松本靖彦、「いずれは死なねばならぬから―フロイトの『快原理の彼岸』とディケンズ」、『多元文化』第 11 号、67-78 頁、2011 年、査読有

〔学会発表〕（計 1 件）

①松本靖彦、「見世物小屋としての『骨董屋』と人形の死に様」、日本英文学会第 81 回大会（於東京大学）、2009 年 5 月 31 日